

ケースメソッドを通して「家庭訪問」を批判的に考える

教材「12番目の妊娠」から学ぶ

キンジョウ ヨシヒデ*
金城 芳秀*

- 目的** ケースメソッド研修において、公衆衛生看護活動として「家庭訪問」を批判的に考える。
- 方法** 2002年より、“12番目の妊娠”をケースメソッド教材として開発してきた。このケースストーリーに含まれていたジレンマは、ある保健師が“夫婦の問題”に介入すべきかどうかであった。2002年7月から2003年2月までに、2つの研修でケースティーチングを実施した。最初の研修の参加者は、わが国の保健職者18人（保健師13人、課長職の上司5人）、2番目はカンボジアの保健職者9人（助産師8人、医師1人）が対象であった。
- 結果** 両研修の参加者はケースから得られた問題を分析して意思決定を行った。それらの意思決定は有益であり、それぞれ異なる視点となった。わが国の保健師らは他の保健職者と協同で介入することを支持した。一方、カンボジアの助産師らは自ら家族計画を積極的に実施する接近法を選択した。両研修での討議において、この「12番目の妊娠」は以下の3点を満足した：(1)参加者はケースの中の情報を用いて問題に取り組んだ；(2)潜在的な解決策を評価するために、参加者は分析的に考えた；および(3)参加者が分析を行う上で十分な情報がケースに含まれていた。
- 結論** 両研修は、介入の道具として「家庭訪問」を批判的に考えることを促し、公衆衛生看護活動に必要な技能を考える上でもよい機会を提供した。
- Key words**：家庭訪問，保健師，ジレンマ，ケースメソッド

1 緒 言

ケースメソッドは討議に基づく体験を重視した問題解決型の学習方法である。これはハーバード大学法律大学院で行われていた判例研究の授業方法を同大学経営大学院が応用・発展させた教育方法である¹⁾。現在、医学関連におけるケースメソッドの応用領域は国際保健、臨床医学から看護まで広範囲にわたっている²⁻⁴⁾。わが国では1980年代より公衆衛生分野に導入され^{5,6)}、帝京大学医学部がケースメソッドを積極的に公衆衛生教育に取り入れている^{7,8)}。国際開発高等教育機構では、1994年よりケースの作成方法（ケースライティング）とケース教材を用いた参加型授業の教授法（ケースティーチング）に関するケース導入研修を実施している。我々は、平成12年度に「沖縄の

保健人材確保の経験と国際協力への実用化のための社会医学的研究」で実施された国際開発高等教育機構によるケース導入研修を受講した⁹⁾。これを機に、我々は沖縄県の保健職者が直面したジレンマとその際の意思決定に注目し、これをケースメソッド化することに取り組んでいる⁹⁾。

その後、我々はケース素材としてある保健師による家庭訪問とそのジレンマに着目した。これをケース教材として開発し、保健職者、看護学生などを対象に、公衆衛生看護活動の道具として「家庭訪問」を批判的に考えることを目的としたケースメソッド研修を実施している。批判的思考とは、疑問を持つこと、分析すること、解釈すること、推論すること、統合すること、知識を実践に応用すること、そして創造的であることの全てを含んでいる¹⁰⁾。ここでは、2つの研修事例をとりあげ、我々の活動状況を報告する。

* 沖縄県立看護大学
連絡先：〒902-0076 那覇市与儀 1-24-1
沖縄県立看護大学 金城芳秀

II 研究方法

1. ケースライティング

2001年12月から平成2002年3月までに、C保健師および関係者を対象にした面接取材、電話取材を通してケース教材を作成した。その際、個人情報保護を目的で、年代、地名、人名、家族構成などの一部変更を行った。最終的には内容の整合性などをC保健師に確認し、ケース教材として公表することの承諾を得た。今回、ケースライティングの評価として、ケースティーチングの際にケース教師が行う事実確認（いつ、どこで、誰が、何を）の質問に参加者が正しく回答できるか、参加者がケース内容を分析的に吟味しているか、すなわち、主人公のエリがとった介入（家庭訪問、分娩費用の工面、新生児の訪問指導など）に対する意見を求めることとした。

2. ケースティーチング

2002年度に開催された2つの研修において、ケースティーチングを実施した。研修とは、A保健所における市町村保健事業担当者研修（以下、A研修）と、B大学において国際協力事業の一環として行われたインドシナ母子保健看護コース（以下、B研修）である。A研修は市町村の保健事業担当課長5人と保健師13人の計18人、B研修はカンボジアの医師1人と助産師8人の計9人であった。研修は、1.ケースメソッドの概略説明、2.あなたの意思決定の確認、3.ケースに関する事実関係の確認、4.グループ討議およびロールプレイ、5.全体討議、6.あなたの意思決定の最終確認、という順序で実施した（図1）。今回の参加者はいずれもケースメソッド研修は初めての受講者であった。このため、通常は事前に配布するケースストーリー（付録1）とティーチングノート（付録2）を当日の配布資料とし、ティーチングノートで設定した発展的課題については参加者の宿題とした。ファシリテーター役のケース教師は参加者に対して、「あなたがエリならばハマの12番目の妊娠にどのように関わりますか」と問い掛け、1.家庭訪問を積極的に継続する、2.家庭訪問以外の別の方法を実施する、3.他職者（社協職員等）に引き継ぐ、4.介入を止めて静観する、5.どうしていいかわからないので誰かに相談する、と5つの選択肢を提示した（図2）。さらに、登

図1 ケースメソッド研修の内容

1. ケースメソッドの概略説明
2. あなたの意思決定の確認
3. ケースに関する事実関係の確認
4. グループ討議およびロールプレイ
5. 全体討議
6. あなたの意思決定の最終確認

図2 あなたの意思決定の確認

あなたがエリならばハマの12番目の妊娠にどのように関わりますか

1. 家庭訪問を積極的に継続する
2. 家庭訪問以外の別の方法を実施する
3. 他職者（社協職員等）に引き継ぐ
4. 介入を止めて静観する
5. どうしていいかわからないので誰かに相談する

場人物の立場からの意思決定として、あなたがハマならばエリの保健指導にどのように関わりますか、あなたが菊三ならばエリの保健指導にどのように関わりますかと問い掛け、選択肢を設定せずに自由な意見を求めた。今回、ケースティーチングの評価には、参加者から自発的な討議がみられたか、参加者間で笑顔がみられたか、ケース教師が教場をどの程度移動したかなど、3項目を用いた。

III 研究結果

1. ケースストーリーについて

今回のケース事例には明らかな正解がなかった。また、参加者は当日の短時間の設定にも係わらず、問題を解決する人、意思決定をする人を特定していた。そのケースストーリーの要約を以下に、詳細は“ケースから学ぶ”に示した（付録1参照）。

タイトル：12番目の妊娠

背景：西平村の1980年における全人口は1万1千人で、15歳未満の人口が約25%を占めていた。駐在保健婦歴7年の東城エリは沖縄県の典型的な農村である西平村に赴任した。

ストーリーのはじまり：赴任したばかりのエリは村内で噂されていた“12番目の妊娠”に驚き、その夫婦が本当に望んだ妊娠・出産なのか、疑問を抱いた。

主要な事件：エリは予防接種や住民健康診断の未受診を理由に上山ハマの家庭訪問のきっかけを作った。エリは生活に窮していたハマ夫婦の分娩費用を工面するために、農地改善費用の保証人になった。その後、ハマは無事に女兒を出産した。

追加的な事件：エリは新生児の育児指導を理由に家庭訪問を継続した。しかしハマの夫の菊三は家族計画や避妊についての指導を受けようとしなかった。エリは菊三の同席を期待して、菊三宛の手紙をハマに手渡した。

クライマックス：エリは自問自答を繰り返した。夫婦間の問題としてこれ以上立ち入る必要がないことなのか、保健婦がするべきことは何なのか。さてあなたがエリならば、菊三とハマにどのように係わりますか。

2. ケースメソッド研修について

両研修において、ケース教師が行った事実確認（いつ、どこで、誰が、何を）の質問に参加者は正確に回答していた。また、参加者は保健師エリのハマに対する介入の工夫（住民健診、乳児健診、血圧測定）についても正確に指摘した。一方、参加者が問題視した点は、エリがハマの保証人になったこと、他職種との協力体制、他者（家族）への働きかけが少ないことなどであった。さらに参加者はハマの妊娠に対する諦め的な態度、ハマ自身も菊三も健康管理の意識が低いこと、菊三は妊娠と母体の健康に対する認識が低いことなど、菊三夫婦の潜在的な問題について批判的に分析していた。なお、B研修では、研修終了後も駐在保健婦制度、母子健康手帳など、沖縄県の母子保健事情に関する質問が多く出された。

参加者は討議の前後に「あなたならばどうしますか」という意思決定が求められた。今回、討議前の意思決定では参加者間にばらつきがみられたが、討議後の最終的な意思決定では、A研修の参加者は他の専門職と協力体制を構築する方向を積極的に支持した（図2の選択肢2と3の折衷案）。一方、B研修の参加者は家庭訪問を継続し、最後まで一人で介入する行動を選択した（図2の選択肢1）。なお、両研修ではエリが菊三に書き残す

手紙をエリの立場になって書いてもらい、その場で朗読するロールプレイを実施した。その結果、ユーモアのある手紙の内容がその場の雰囲気を取り上げ、より積極的な意見を引き出していた。一方、ケース教師が研修場内を動き回る場面はほとんどみられなかった。両研修は終始和やかな雰囲気で行われ、参加者間には笑顔がみられた。

両研修の討議内容を踏まえると、「12番目の妊娠」は、(1)参加者がケースの中の情報を用いて問題に取り組むこと、(2)参加者が潜在的な解決策を検討し、分析的に考えること、および(3)参加者が分析する上で十分な情報がケースに含まれていること、これら3点を満足した。

IV 考 察

ケースメソッドは到達する学習内容に差が無いように、教師と学習者が支援的、共同的な学習環境を構築することが求められる。今回は、初めてケースティーチングに参加する対象者ということから、研修開始時にケースメソッドの目的や方法を説明し、その後、参加者各自がケースストーリーに目を通す時間を設定した。このように事前学習の機会を設定できなかったため、ケースの発展的な課題を深く討議する場として研修を位置付けることはできなかった。この点が本研究の制約の一つである。

通常、ケース教師は参加者の積極性を引き出すために研修場内を歩き回ることで、振付師的なクラス・プランニングが必要とされている¹⁾。今回、A研修では事前に研修会場・参加者の下調べを実施できなかったために、当日本番のクラス・プランニングとなり、しかもB研修では通訳を介した研修となったため、ケース教師が振付師的な役目を十分に演じたとはいえない研修となった。これらの点は、より有効なケースメソッドの実施という面から反省材料と言わざるを得ない。

Lynnはケースティーチングの評価項目として、討議の中で参加者から自発的な意見がどれだけ出されたか、上り調子で討議が終わったか、参加者に笑顔がみられたか、などが重要としている¹⁾。今回の研修は適度な緊張感を保ちながら、時には参加者間で笑いが起こり、参加者間の確認の質問、あるいはケース教師に対する挑戦的な意見が出された（ハマ夫婦のご意見番となる人物の

存在は?! ハマ夫婦と子どもの関係がみえない?! 児童虐待の可能性はないのか?! など)。さらに最終的な意思決定として事前に準備された選択肢に囚われずに(図2)、選択肢の折衷案や個人で徹底的に介入するという発言がみられた。これらは参加者が批判的な思考を展開したこと、自分自身の問題としてケースを分析したことを示唆していた。

今回の研修では、参加者間の相互作用を期待したため、グループワークとしてエリが菊三宛てに残した手紙を実際に書いてもらい、エリ、ハマ、菊三の役をそれぞれ即興で演じてもらった。その結果、手紙の内容には相違がみられ、手紙に対するハマや菊三の反応にもそれぞれ個性があり、ロールプレイは自由な意見交換を引き出す場となっていた。また、最終的な意思決定に向けては、ケースストーリーに関する簡潔な質問による事実の確認、グループ討議、そして全体討議と進行したことから(図1)、戸惑いのあった参加者も、ケースストーリーの主人公の立場になって、自分なりの意思決定を導き出すことが可能となっていた。したがって、この研修では参加者が互いの価値観や経験の相違に気づき、討論に基づく相互学習の場が形成されたと考えられる。

A 研修では、課長(上司)は保健師(部下)の専門性について理解を深め、保健師は道具としての家庭訪問を再認識するなど、相互作用のある討論が展開された。たとえば、保健師が健診資料の確認や血圧測定からケースとの接触を図る工夫を行ったこと、そのこと自体が課長(上司)側に強い印象を与えていた。一方、B 研修の場合、子どもの数がカンボジアの現状に近い場合、日常的であるが重要な問題として討論が展開された。その際、特徴的であったのは最後まで妊産婦に徹底的に係わるという積極的な意見が強く支持された点である。この点は、必要に応じて他職者を巻き込みながら適切な問題解決を図るというわが国の保健師側の見解とは異なっており、わが国とカンボジアの社会環境・人的資源の相違を示唆するものである。

ケースメソッド研修の有効性に関するスウェーデンでの研究例が最近注目されている¹¹⁾。この研究では、一般医に配布した診療ガイドライン(冠状動脈疾患患者の二次予防としてLDLコレステ

ロールを下げることの重要性)を背景にして、ケースメソッド研修を教育的な介入方法と位置付けている。そこでは、一般医を対象に診療ガイドラインの講義をした対照群と、ケースメソッド研修を実施した介入群を設けたランダム化比較試験が実施された。その際、専門医によるケアを特別群としている。これら3群を比較した結果、対照群ではLDLコレステロール濃度に変化がみられなかったものの、介入群はLDLコレステロール濃度が低下し、これは特別群と同等な成績であったと報告されている¹²⁾。このようにケースメソッド研修を疾病予防の介入方法として位置付けることも可能となっている。

国立公衆衛生院(現、国立保健医療科学院)は公衆衛生従事者を対象にしたケースメソッド研修の重要性を報告している^{13,14)}。さらに注目すべきは、ヘルスプロモーションの政策開発に携わる当事者からケース教材が提供された点である¹⁵⁾。沖縄県においては福祉保健所を中心に管内市町村・保健師のエンパワーメントとしてケースメソッド研修が企画・実施されている。これは保健師が自らケース素材を提供し、自己開示をするよい機会となっている。このような当事者によるケースメソッドの実践は、医療・福祉・保健活動の質を高める一つの方向として、先駆的な取り組みと考えられる。

ランダム化比較試験のデザインを用いて行われた米国における15年の追跡研究から、低所得者層の母親を妊娠中から出産後2年間、家庭訪問を通して母子保健指導することにより、妊娠に伴う高血圧症、子どもの不慮の事故、児童虐待(ネグレクト)などの発生を予防する効果があったと報告されている^{16,17)}。沖縄県も全国同様に児童虐待の相談件数が年々増加傾向にあり、虐待の種類別ではネグレクトが多くなっている¹⁸⁾。加えて、低体重児出生率、周産期死亡率、新生児死亡率および乳児死亡率が全国に比して高く、さらに10代の人工妊娠中絶、性感染症、不登校などが増加傾向にあり、飲酒、喫煙の低年齢化など、母子保健上の重大な課題が示されている¹⁸⁾。これらの状況を踏まえると、家庭訪問という地道な公衆衛生看護活動を再認識することも保健政策として重要と思われる。

V 結 語

今回の研修は、保健師の専門性をより深く考える機会を提供した。研修参加者はケースの情報を使って批判的に考え、分析的に必要な情報をケースから得ていた。このケースは公衆衛生看護活動の道具として「家庭訪問」を批判的に考える教材として有効であることが示唆された。

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号 14580229) により実施した。なお、本研究の一部は第62回日本公衆衛生学会において発表した。本研究の展開を終始ご指導頂いた小川寿美子博士 (琉球大学医学部)、研修の機会を作って頂きました国吉秀樹医師 (沖縄県中部福祉保健所課長)、さらには第62回日本公衆衛生学会自由集会「元気の出るケースメソッド (金城芳秀, 柏樹悦郎)」にて建設的なご意見を頂いた参加者の方々に心から感謝申し上げます。

(受付 2003.12.22)
(採用 2004.11.15)

文 献

- 1) Lynn LE. Teaching & learning with cases: A guidebook. Chatham House Publishers of Seven Bridges Press, LLC. 1999.
- 2) Beech DJ, Domer FR. Utility of the case-method approach for the integration of clinical and basic science in surgical education. *J Cancer Educ.* 2002; 17(3): 161-4.
- 3) Bunch WH, Dvonch VM. Moral decisions regarding innovation. The case method. *Clin Orthop.* 2000; 378: 44-49.
- 4) Tomey AM. Learning with cases. *J Contin Educ Nurs.* 2003; 34(1): 34-38.
- 5) 福田勝洋, 須川和明: 公衆衛生学における Simulation Exercise (模擬演習). *医学教育.* 1982; 13: 395-398.
- 6) 矢野栄二, 田宮奈々子, 長谷川友紀: 模擬演習 (Simulation Exercise: SE) による公衆衛生教育. *日本公衆衛生雑誌.* 1998; 43: 270-278.
- 7) 矢野栄二, 田宮菜菜子, 山内泰子: ケースメソッドによる公衆衛生教育—Simulation Exercise (SE). 南江堂, 2000.
- 8) 矢野栄二, 山内泰子: ケースメソッドによる公衆衛生教育. 第2巻. 篠原出版新社, 2003.
- 9) 金城芳秀, 岡村 純. 沖縄県一離島村における手すり取り付けに関するケースメソッド—電気ドリルを持った新人保健婦. *沖縄県立看護大学紀要.* 2002; 3: 107-113.
- 10) Henry B. 編. 学士・修士課程の看護学生のコンピテンシー. 批判的思考とコミュニケーション. 沖縄県立看護大学シンセサイザー. 2002; 1(2): 1-3.
- 11) O'Malley PG, Berbano E. Case method learning for general practitioners reduces cholesterol concentrations in coronary artery disease. *Evid Based Med.* 2003; 8(3): 95.
- 12) Kiessling A, Henriksson P. Efficacy of case method learning in general practice for secondary prevention in patients with coronary artery disease: randomised controlled study. *BMJ.* 2002; 325: 877-880.
- 13) 岩永俊博, 櫃本真一, 内野英幸, 竹島 正, 向山晴子, 岩木康生: 保健師医師研修教材としてのケースライティング. 平成9年度総合的地域健康教育検討事業 公衆衛生における卒後教育研修体系に関する研究報告書 (代表: 古市圭治), 75-113, 1998.
- 14) 上畑鉄之丞, 石井享子, 櫃本真一, 桜山豊夫, 加藤昌弘: 教育研修教材の改善(1)事例研究とケースメソッド, 平成8年度総合的地域健康教育検討事業公衆衛生における卒後教育研修体系に関する研究報告書 (代表: 古市圭治), 71-156, 1997.
- 15) 石井敏弘, 櫃本真一 編: ケースメソッドで学ぶヘルスプロモーションの政策開発—政策化・施策化のセンスと技術, ライフ・サイエンス・センター, 2001.
- 16) Olds DL, Eckenrode J, Henderson CR Jr, et al. Long-term effects of home visitation on maternal life course and child abuse and neglect. Fifteen-year follow-up of a randomized trial. *JAMA.* 1997; 278: 637-643.
- 17) Kitzman H, Olds DL, Henderson CR Jr, et al. Effect of prenatal and infancy home visitation by nurses on pregnancy outcomes, childhood injuries, and repeated childbearing. A randomized controlled trial. *JAMA.* 1997; 278: 644-652.
- 18) 沖縄県福祉保健部健康増進課. 健やか親子おきなわ2010. 沖縄県 2002年3月.

付録1 “ケースから学ぶ”

12番目の妊娠

駐在保健婦である東城エリは驚いた。社会福祉協議会職員から聞いた話では、ある女性が12番目の子供を妊娠しているらしい。夫婦が本当に望んだ妊娠・出産なのであろうか、このことが気になって仕方がないエリであった。

保健婦歴7年のエリは10ヶ月前に西平村へ赴任してきた。ここ西平村の1980年における人口は1万1千人で、14歳以下の若年層の占める割合が約25%と、沖縄県下の典型的な農村である。これからサトウキビの収穫期を迎えようとしていた。

数日後、エリの頭をよぎったのは、11番目の子供が幼児かも知れない、もしそうであれば予防接種の接種状況はどうだろうか、であった。さっそく住民基本台帳および予防接種台帳を確認したところ、上山ハマには2歳になる男の子がいた。この男児は昨年今年も麻しんの予防接種を受けていなかった。さらに住民健診台帳を確認すると、ハマも年1回の定期住民健康診断（以下、健診）を過去3年受診していなかった。エリは受話器を持ち、予防接種や健診のことで相談したいことがあるので、都合のよい家庭訪問の日時をハマに尋ねた。

ハマは18歳で結婚してから、今年20歳になる長女を頭に5男6女の11人の子宝に恵まれていた。エリとの挨拶もそこそこに、予防接種は来年必ず受けるからとエリを追い返そうとするハマであった。エリは健診の未受診を理由に鞆から水銀血圧計を取り出した。エリはハマの手をとりながら、血圧を測ったら帰るからと、ハマを落ち着かせた。問題となる血圧値ではなかったが直ぐに結果を告げずに、最近の体調について問診をはじめた。ハマは徐々に閉ざしていた口を開き、妊娠について語り出した。ハマは出産すべきか思い悩んでいるうちに中絶できない妊娠中後期となったらしい。経済的に余裕がないので病院へも行けず、出産予定日も把握していない状態であった。

翌日からエリは忙しくなった。産科医師の健康診査がまず必要である。これまでハマは全ての子供を助産所で出産していた。今回も、「助産所で診察を受けたい」という本人の強い要望を受けて、エリはK市の開業助産婦へ電話をかけた。その際、無料で妊娠証明書の記事ができないか、

頼み込んだ。次は役場での母子健康手帳の発行手続きである。エリは社会福祉協議会（以下、社協）に駆け込んだ。分娩費用の無利子での借用を打診するためである。その結果、分娩費用は理由として認められないが、農地改善費用としてならば無利子で借金することができるとの情報を得た。その晩遅く、エリは菊三夫婦と話し合いの場を持った。菊三は農家ながらパートタイムでトラックの運転手をしていた。菊三夫婦は社協の生活資金借用ができるのならば非常に助かると、エリの借金の提案を受け入れた。

数日後、エリは助産所所長からある承諾をもらった。社協専門員とエリが保証人になることを条件に、助産所への分娩費用の支払いを数ヶ月先送りすることを了解してもらったのである。しかしエリは分娩費用の保証人になることに躊躇がなかった訳ではない。保健婦がやるべき範囲を超えているという村役場内の雰囲気を感じていたからである。エリはハマのほっとした顔を思い出していた。

エリは保健所・看護課の大畑課長の部屋にいた。エリにとって大畑課長は上司であり、先輩保健婦でもあった。エリは夕方5時以降の家庭訪問がここ数ヶ月で倍増した理由を説明した。大畑課長は脇机から用紙を取り出し、これまでの交通費を旅費として申請しようエリに指示した。そして、「この件で困ったことがあればいつでも相談するように」と声をかけた。

ハマのお産は軽く、女兒が生まれた。母乳の出方もまずまずで、とりあえず問題はない。エリはさらに継続指導すべきかどうか迷っていることが一つあった。それは菊三夫婦を対象に避妊法を教育するかどうかである。ハマも菊三もいくら何でも子供は作らないと一笑した。エリは聞く耳をもたない菊三夫婦に対して、新生児の育児指導を兼ねた定期訪問をしたいと申し出た。育児のベテランであるハマは怪訝そうな顔をした。とにもかくにもエリの家族計画に関する家庭訪問は夜8時からと決まった。

家族計画の指導を目的とした訪問の際、菊三は自宅にいなかった。不在の理由は知人との会食であった。今回は必ず同席して欲しいことをハマに伝え、その夜は月経周期の理解と基礎体温について指導した。その次も菊三は不在であった。菊三

の態度はエリを困らせた。ハマから聞き出した菊三の言い分は、「二人で聞く必要はない」、「避妊はお前が気を付ければよい」であった。無視されるかも知れないと思いつつ、エリは菊三宛に置き手紙を残した。

エリは自問自答を繰り返した。これ以上は夫婦間の問題として立ち入る必要がないことなのか、もし菊三夫婦に何らかの指導を継続するとしたら、菊三夫婦に必要なことは何なのか、エリは自らに決断を迫るのであった。

さて、あなたがエリの立場にあるならば、エリのようにハマの12番目の妊娠に取り組めますか。さらに菊三あるいはハマに対してどのような指導を行いますか。そして、あなたが菊三あるいはハマだったら、エリの行動にどのように対処しますか。

付録2 “12番目の妊娠” ティーチングノート

1. 学習対象者

保健・看護職者および看護学生

2. 学習目標

公衆衛生看護活動の道具として「家庭訪問」を批判的に考えること

3. 課題（登場人物の立場から意思決定）

- (1) あなたがエリならばハマの12番目の妊娠にどのように関わりますか。
- (2) あなたがハマならばエリの保健指導にどのように関わりますか。
- (3) あなたが菊三ならばエリの保健指導にどのように関わりますか。

4. 発展的課題

- (1) 家庭訪問による母子保健指導の現状と課題について
- (2) 低体重児出生、乳幼児突然死症候群、児童虐待などの予防について（文献（例えば、JAMA. 1997; 278: 637-643, 644-652）を指定する）
- (3) 人工妊娠中絶、性感染症および避妊法について

5. 教案

- (1) ケースストーリー概略説明
- (2) 駐在保健婦制度、母子健康手帳およびコンドームについて
- (3) グループ討議(置手紙の内容の決定)とロールプレイ

エリ役：菊三宛の置手紙の朗読

菊三役：置手紙を読んでハマへ一言

ハマ役：菊三の一言に対して一言

CRITICAL THINKING ON “HOME VISITS” THROUGH THE CASE METHOD USING THE TEACHING MATERIAL, “THE TWELFTH CHILD BIRTH”

Yoshihide KINJO*

Key words : home visits, public health nurse, dilemma, case method

Objective To use case method seminars in order to critically assess “home visits” for public health nursing practice.

Method “The twelfth childbirth” was developed for use as material for the case method in 2002. This case story involves the dilemma of a public health nurse as to whether or not she should intervene in the “private affairs” of a married couple. Case teaching was performed in two seminars during the period from July 2002 to February 2003. Participants in the first seminar were 18 health professionals (13 public health nurses and five supervisors) in Japan, and nine health professionals (8 midwives and one physician) from Cambodia took part in the second.

Results For the problems from the case, the participants in the two seminars made their decisions analytically. Decision making was informative and took different directions. The public health nurses in Japan advocated a collaborative intervention with other health professionals. On the other hand, the midwives from Cambodia selected an approach involving heavy commitments to family planning undertaken by individual midwives. From the discussion in the seminars, this case story was satisfied through the following: (1) the participants used the information in the case to address the problem; (2) the participants thought analytically in order to evaluate potential solutions; and (3) the participants had sufficient information for analysis in the case.

Conclusion Both seminars provided good opportunities to enhance critical thinking on “home visits” as a tool for intervention and to develop thinking skills needed for public health nursing practice.

* Okinawa Prefectural College of Nursing